
少女の狼狽

亜倉 暮亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女の狼狽

【Nコード】

N6560Y

【作者名】

亜倉 暮亜

【あらすじ】

少女は狼狽していた 猫とTシャツのお話。

学園ヘタリアでにやた化。日本がとにかく愛されてるギャグ小説。

一応女体化してるので、BL注意はしていません。

しかし女体化ゆえに一部GLになるという、本末転倒的なことが起こっています。

（前書き）

* 注意 *

- ・ 一部ノーマル、一部百合でお送りいたします（ ）
- ・ とにかく日本が愛されてる
- ・ 勢いで出来た小説、であることを念頭に置いてください。

* 名前紹介 *

日本の普通の学校という設定なので、名前も日本人っぽいのを勝手に作りました。

あと、原作にて既出の女体化とは設定が異なります。基本的に顔も性格もそのままです。

- ・ ニチモト 日本 キク 菊

日本です。女体化してます。

- ・ トルコ 取古 サイク 彩功

トルコです。名前は人名の『サディク』より。

・霧^{ギリシヤ}之野 麗^{レイラ}良

ギリシヤです。女体化してます。名前は前身に人名の『ヘラクレ
ス』『平^{ヘラ}良』があり、『ヘイラ』と読んだ時の音を取って『レイ
ラ』に。

それではどうぞ。

ぽかぽか陽気の、梅雨の迫るある日。校庭のベンチに、並んで座る三人の姿があつた。

その真ん中に座っているのは、黒髪ボブに黒目がちな目をした、華奢な少女だつた。長いスカートの下から覗くタイツに包まれた棒のような足は、綺麗にそろえられている。

そんな少女は、なんとも大柄な男女に挟まれて、少々困惑した表情を浮かべている。

そう、少女　日本菊は狼狽していた。

「どつちなんだ、日本!？」

「…いえ、ですからね…」

彼女は今、目前にいる二人の『友人』の、どちらが『好き』なのかはつきりさせるように求められているのであつた。

そう、わざわざ『付きで書いた通り、もうなんか色々おかしいのである。菊は『友人』として二人と付き合っているのに、二人的には菊がいわゆる『恋人』なつもりでいるのだ。というか、それだと菊が二股をかけていたことになるのだが、どうしてそのあたりをスルーできるのか。(それ以前に片方に至っては、菊と同じ女性であることは、スルーしなければ更に事がややこしくなる)

とにかく、菊は狼狽していた。

二人はそれぞれ一人ずつであれば、普通に意思疎通の可能な人物であるが、二人そろってしまつとそれができなくなる。止まらない口喧嘩を始め(これは菊の件に限らない)、人の話を聞かなくなるのだ。

正直菊は、どちらも友人として いや、親友として二人が好きであつたが、どちらか決めると言われても困つてしまう。それにそういうことを本人たちの前で言うのも、菊的なモラルが許さないのだ。

第一、親友である二人は、どちらが好きとか、まずそんな存在でもない。菊は、そう説明しようと、おずおずと口を開いた。

「あのですね、私は……俺だよな！俺だよなっ！！……。いえ、ですから「む……私だよ……！」……。」

ですよねーな気分である。やはり二人は二人でいると話を聞いてくれない。

ちなみに菊の話を真つ先に遮つたのは、大柄な男の方 高三にして既におっさん感溢れている青年の、取古彩功だ。おっさん感が溢れているからといって、まだ高三の彼に大人気ないとか言うのは少々酷である。言わずもがな、アイラブ日本だ。

そしてその反論のために同じく話を遮つたのは、大柄というか背の高い女 猫好きな哲学者、霧之野麗良である。彼女も彩功と同じ高三で、趣味は日本と猫と昼寝なぼんやり少女である。

そんな二人に挟まれて、再び始まった口論にため息をつく少女、菊はいわゆる大和撫子という部類の人間だ。今時としては確かに絶滅危機種の大和撫子だが、にしても需要高えな気分の菊だった。

「なあ日本！」

「え？あ、はい！？」

と、突然彩功に話を振られる菊。ああ巻き込まれるな。菊は確信した。

「俺の方が日本が好きだよな！」

「え？さあ…（それ私に聞くのおかしくないですか）」

「いいや…私の、方が…日本、猫、好き…だよね」

「ええまあ、好きですが」

「私も、好き…ほら、私の方が…好き」

「…えーと（まず私と霧之野さんが猫を好きなことと霧之野さんが私を好きであることとの因果関係がいまいちつかめませんが）」

「くっ…てやんでえ！好きの大きさはそれだけじゃ測れねえや！」

（え、測れてたんですか）

と、菊が二人に共通する謎の定義に戸惑っていると、彩功がどこからともなく白いＴシャツを取り出す。

「ほら見てくれ日本！俺なんか日本の名前入りＴシャツ作ったんだ！」

「それはちよつと引きます」

ちよつとおしゃれ感を意識してか、あからさまに中心ではなく向かって右上の胸元に、絶妙に下手な字（手書きだ！）で『にちもと きく』と書かれているのには、流石の菊も齒に衣を着せぬ（着せる余裕もない）物言いになってしまった。というかそれではおしゃれというより、体操服の名札チックな香りがする。と菊は思ったが口にはしなかった。

「え…や、でも見てくれ！日本の分も作ったんだぜえ！」

「なぜ私の分にも私の名前がっ!？」

それでは正にさつき菊の思った体操服と同じだ。何が嬉しくて自分の名前を書いたＴシャツを着なければならぬのか。なまじシンブルなＴシャツだけに、実際に二人で着たら、実にシュールな光景が見られるだろう。

「に、日本…私も、見て」

負けじと対抗してきた麗良は、そちらを向いた菊に抱いていた猫をつきだした。

「猫…だよ」

「猫…ですね」

「…」

（……私は何を期待されているんですか…！）

麗良に見つめられ、猫に見つめられ、自らも猫を見つめずにいられないまま、理解しがたいその状況に嫌な汗をかく菊。

しかし、しばらくその猫を見つめていると、もうそんな困惑なんてどうでもよくなった。

堪えきれずその猫を抱いて良いですかと言う菊に、微笑んで猫を引き渡す麗良。

幸せそうな菊とドヤ顔の麗良に、彩功は膝を拳で叩き、悔しそうに言った。

「ちくしょうめ！猫に勝てる訳ねえだろい！」

反則だこんちくしょう！と地団駄を踏んだ彩功だったが、麗良は既にドヤ顔を引っ込めて、菊と猫に和んでいたのだった。

『日本！今度は俺の名前入りＴシャツを作ったんだ！これなら着てくれるよな！』

『問題点の履き違いが甚だしすぎますドン引きです』

『…なんか俺に冷たすぎねえか日本』

（Ｔシャツは流石に引きますよ…）

（後書き）

原作の、トルコという国を紹介する、豆知識みたいなコーナーにあった話から妄想したお話。日本語で『トルコ』って書いたＴシャツが売ってる、みたいな話でした。多分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6560y/>

少女の狼狽

2011年11月20日11時28分発行